

勾玉・管玉

弥生時代中期

玉類の製作は朝日集落でおこなわれた手工業生産のなかでも、もっとも専門性の高いものの一つであった。工房は集落の限られたエリアに配置され、他地域産の石材や高度な技術が用いられていることから、専門の工人集団が集落内に居住していたのではないかとみられている。

工房跡からは緑色凝灰岩製の管玉、ヒスイ製の勾玉などが出土している。原石、未製品、細かな破片といった玉類の各製作工程を示す資料の他、施溝具として用いられた石鋸、穿孔具とみられるメノウや水晶などの石錐（石針）、溝のついた砥石など、ひとつおり工具類が出土している。

玉作りは、北陸や近江からの技術的な影響がうかがえ、原石や工具類もこれらの地域から持ち込まれた可能性が高い。専用の工房が備えられていたことから、玉作りに携わった技術者は外部からの移入した特殊な集団だったと考えられ、北陸方面からの原材料の入手、太平洋側での製品の流通など、広い範囲での交流に関わっていたのかもしれない。

玉作り工具と管玉の製作工程



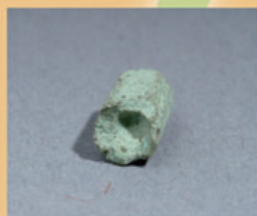
玉錐



④研磨



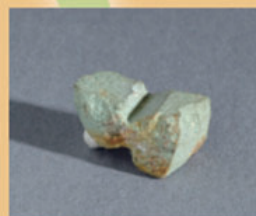
施溝具



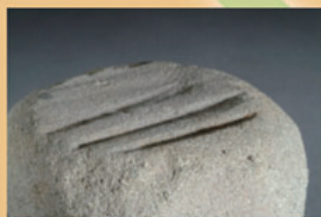
③穿孔



玉原石



①施溝・分割



玉砥石



②整形



クサビ

ヒスイ製勾玉の未製品

